

研究課題 (テーマ)	小児分野における、ユマニチュード®の考えに基づいた「見る・触れる・話しかける」の技術の適正を客観的に評価するモデル人形の開発		
研究者	所属学科等	職	氏名
代表者	看護学部	講師	若瀬 淳子
分担者	看護学部	講師	高木 園美
	看護学部	講師	寺井 孝弘
	看護学部	助教	松本 美子
	教授	工学部	鳥山 朋二
	講師	工学部	浦島 智
	助教	工学部	森島 信
研究結果の概要			
<p>本研究は、昨年度、乳児の<u>コミュニケーションの視点（見る・触れる・話しかける）</u>を明らかにするための感覚機能（視覚・聴覚・触覚）の知覚範囲の選定、モデル人形試作までを以下の①～⑤のプロセスで行った。</p> <p>① 乳児の発達の段階を根拠とした感覚機能（視覚/視力と視野、聴覚/知覚する音の高低と大小、触覚/快の情動を知覚する接触範囲や接触圧）の特性に関する先行研究の結果から、乳児とコミュニケーションをとる際に乳児が心地よく感じる知覚範囲の抽出。</p> <p>② 抽出した知覚の範囲を研究者間で合意し、モデル人形に感知させたい感覚機能の範囲を決定し、感覚機能を受信できるセンサー機器を検討し選択した。</p> <p>③ 既存の人形に選択したセンサー機器を組み込み、モデル人形を試作した。</p> <p>④ 試作の段階で、看護学部の研究者が、人形の抱っこと移動のケアを行い、その際にセンサーが受信した視野、接触範囲や接触圧、抱っこ時の人形の頸部の角度や頭部の位置などのデータをパソコン上に可視化し、センサーの感度の確認を行った。一方で、センサー機器を人形に組み込むことで、既存の人形の乳児らしい外見ができるだけ損なわれないよう、センサーの感度設定、大きさ、重量などの微調整の課題が明らかとなった。</p> <p>⑤ ④の課題を解決し、試作モデル人形を完成した。</p>			
今後の展開			
<p>試作したモデル人形を活用したプレテストを令和3年度①～⑤の計画で行い、実用化できる教材モデル人形の開発につなげる。</p> <p>① 富山県立大学の倫理審査委員会への倫理申請、および承認を得る。</p> <p>② 研究対象者への協力依頼の説明を文書および口頭で行い、同意を得る。</p> <p>③ 研究参加者の選定。（育児経験者または、乳児へのケア技術の専門性を持つ母性看護学の教員で研究協力の同意を得た者20名程度：A群と、乳児との関わり体験がない学生のうち研究協力の同意を得た者20名程度：B群）</p> <p>④ プレテスト実施：小児看護学の共同研究室にケアを実施するための環境を設定し、研究参加者にプロトコールにそったケアを試作したモデル人形に対し行ってもらう。</p> <p>⑤ モデル人形が受信した情報からモデル人形に対して行った、<u>（見る・触れる・話しかける）のケアの適正をA群とB群の比較から分析できるか、モデル人形の性能を評価する。</u></p> <p>以上のプレテストを経て、モデル人形を完成させる。教材としての効果は継続的実験研究で評価していく。</p>			